

## 日本労働年鑑 特集版 太平洋戦争下の労働者状態

The Labour Year Book of Japan special ed.

## 第四編 労働強化と労働災害

## 第一章 強制労働と労働強化

## 第三節 戦時下の鉱山

「社会政策時報」一九四二年三月号は「戦時生産力昂揚特輯」と銘うたれたが、そのなかで、当時協調会調査部嘱託の岩城功は、「世上の言葉を以ってすれば、石炭増産においては《移動の防止、稼働率の向上》この二つこそ最上の解決対策だといふのである。一口に云へば労力の確保が先決問題だ」と書いている。しかし第二次大戦中には、炭鉱の労働力を確保しなければならないといっても、国内の労働力給源はすでに枯渇していたうえに、炭鉱から徴兵されていく者も少なくなかった。政府の見積もりによれば、戦争中軍務に服していた炭鉱労働者は六万八千名にのぼる。そこで、婦人・年少者による補充のほか、朝鮮人の「集団移入」、勤労報国隊・徴用等の短期労務者、中国人・白人捕虜等があいついで投入された。その結果、この数年間に労働力構成は急変するにいたったが、とくに注目されねばならないのは、坑内夫なかんずく直接夫の大半が朝鮮人によって占められるようになったことである。

また、「勤労隊員は割当人数が確保されることはきはめて稀であった。誰もが炭鉱へ来たがらなかったからである。……だから炭鉱の方では毎回未経験者を迎え、その度ごとに予備訓練をしなければならない。ところが労働不足が深刻になってくるに従って、従来はまったく雑用ていどのことしかやらせなかったこれらの人々に、採炭や掘進をやらせねばならなくなった」（「社会政策時報」一九四四年一月号、某炭鉱労務課長小野哲四郎の論文）。

朝鮮人や中国人が奴隷状態で働かされていたことはいままでのないが、日本人の場合でも食糧は極度にひっばくし、実質賃金も低下していった。労働者たちは、当時の思い出を、こんなふうに綴っている。——米が配給制度になってからは、弁当の分量を少なくしなければならず、午後からは空腹で一時間くらいしか働けず、あとは適当にさぼった。またコンベアーに大きな石を入れ機械を止めたりした。こうでもしなければ身体がもたなかった。そのころ弁当がよくぬすまれた。主食だけでなく大根葉の配給もけんか腰でないと買えなかった。したがって「明日の食糧のことを考えると夜もおちおち眠れなかった」（三菱美唄「生活史」）。また地下足袋その他の物資の欠乏もはなはだしかった。「地下足袋は半年に一回位配給になったが、食糧がないから米と交換して食べてしまう」状態だったし、「作業衣もボロボロで、当時糸がなかったので針金で破れたところをひっばっておりました」が、「敗戦の前年頃には物資がますますなくなり、地下足袋さえもなくなった。農家からワラを買ってきて夜おそく昇坑して疲れた体にむちうちながら明朝入坑するためにワラジづくりまでしなければならなかった」（炭労十年史編纂委員会「あのころのこと」）。しかし、職場が軍事監獄のようになっていたため、就業率は終始八〇%台を下らず、労働時間も逐年延長されていった。

一九四一年以降、気違いじみた増産運動が次々に展開された。その中心母体は、同年末各鉱所毎に設けられた産報組織であった。職制は軍隊化され、命令絶対服従が要求された。分隊長の指揮する五人組がつくられ、上席係員は小隊長、係長は中隊長、班長は大隊長、鉱業所長と呼ぶよう

にまでなったのである。そして、この体制を維持し、増産運動の手段となっていたのは、憲兵・検察・労務が一体の暴力であった。「月の稼働が例えば一六日に達しない者は検事局へ呼び出す。そして、会社の上司の命令に反対するものは陛下の命令に反対するものと判断していつでも処分すると嚴重に申し渡して寮へ入れた。三ヵ月は絶対に家へ帰さない。家族との面会も禁止、それで出勤一〇〇%こういうことをやった」し、「一九四三年頃、高萩では週に一度憲兵がきて会社の労務で稼働日数なんか調べて、少し休んでいるのは長屋からひっぱってきて訓辞をたれてスリッパなんかでブンなぐられたりした。……湯本では警察と検事局が干渉した。警察の命令＝陛下の命令というかたちでやった」(炭労十年史編纂委員会「資料」第三集)のである。朝鮮人・中国人にあってはさらにいちだんと非人間的な酷使によるものであった。一九四一年以降の出炭の「停滞」も、実はこのような暴力支配によって、ようやく維持されていたわけである。

だが、一九四四年以降、就業率だけはどうやら八〇%台を終始維持しえたものの、出炭率の急落はどうすることもできなかった。つまり、前述のような暴力支配をもってしても出炭の「停滞」を維持できないほど生産設備と労働者の状態は悪化するにいたっていたのである。隠然またはなかば公然たるサボタージュ・抵抗、さらに朝鮮人・中国人らの「暴動」の発生は、その現われであった。労働者が坑内でおとなしく働いているように見える場合でも「時間延長ということの中には無意識的な抵抗があった。つまり、割当を早うやってもあと追加される。それに長くおれば弁当も下ってくる。だから長くおるという気風は〔昭和〕一九年頃からかなり自然発生的に出ておった」(炭労十年史編纂委員会「資料」第一集)。

日本労働年鑑 特集版 太平洋戦争下の労働者状態  
発行 1964年

編著 法政大学大原社会問題研究所  
発行所 東洋経済新報社  
2000年2月22日公開開始

---

■ ←前のページ 日本労働年鑑 特集版 太平洋戦争下の労働者状態【目次】 次のページ → ■  
日本労働年鑑【総合案内】

---

法政大学大原社会問題研究所(<http://oisr.org>)

---